

---

# 魔王降臨伝 未知の大陸

imaiwa

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

魔王降臨伝 未知の大陸

### 【NZコード】

N8690E

### 【作者名】

imaiwa

### 【あらすじ】

魔王はある日、空間の歪みに興味本位で手を突っ込むと、異質の世界へ飛ばされてしまった。

(前書き)

連載候補のテスト的な短編です。

俺は魔王。ゼームス大陸を支配し、全ての生き物の頂点に君臨していた。

しかし、ある日、怪しい空間を見つけて、そこに興味本位で手をつっこんだせいで

何故か今、変な世界に立っている。

道端に寝てる汚い人間とな。  
この如等の言葉は分かるんだ  
少し会話を交わしたんだ

「お二、おまえ、アリヤリヤリだ？」

「あん、なんだこいつ、変な格好しやがつて」

「娘、これから、わくわくと興奮立答える。」

そいつがあんまり生意気な口調で俺に溜め口聞くもんだから  
腹に2・3回蹴りを入れてみた。  
すると、そいつは血反吐はきながら横倒れる。

「市です」

「国の名前か？」

「いや、国は日本と言います」

日本か、知らぬ国だな。

俺は男から聞きだした後は、そいつを捨て置き

堅い石の地面が続く道を歩き始める。

取りあえず、どうしようか。

なぜか、この街の連中は俺の姿を見ると、珍しそうに大きく眼を見開いて

横目でちらちら見やがる。

俺の姿が珍しいらしい。

見られるのも、嫌気がさしてきたので、変身でもするか。

「メタモー！」

魔法を唱えると、俺はさつき場所を聞いた汚い男へと姿を変えた。  
臭いな…。

これはたまらない…。

もう少ししましなのと変わろう。

お、変な金属製の輪が一つある乗り物？に乗った若い男が前を横切るわ。

あいつに代わるわ。

「メタモー！」

うん、こっちの方がまだましだ。  
清潔だし、体も引き締まっている。  
まあ、元の体ほどじゃないがな。

さてと、この後どうじよつか。

困ったな、こいつの時はヘルダイスを使うのがいいかもしない。

『ヘルダイス』

直訳すると地獄のサイコロだ。

これはそんじやそちらのサイコロとは違う。

強い魔力を帯びた、魔族の宝物の一つだ。

これを地面に転がし、出た日の表面を頭にこすり付けると  
これから何をすべきか、イメージが頭の中に流れ込んだ。  
とても便利な品物だ。

ん？ワシが堅い地面に胡坐を搔いて、サイロを転がそうとした時  
左の方から何か猪みたいに突進してくるものがいた。  
なんだあれは？金属の箱物？

それはこちらに向つて目障りな音を何度も投げかけてくる。  
良く見ると、その中には人間が乗ってるようだ。

箱物から顔をだし、何か言つてゐるな。少し話しを聞いてみようか。

「いや、てめー道路の真ん中で座つてんじゃねーよ」

「道路？」

「そりだよ、そつわとじけよー」

どうやらここは、道路という場所に俺がいるもんだから  
邪魔だと言つてゐるみたいだ。

人間が俺に命令するのか？

生意気な奴め。少しいたぶつてやるか。

「おー、お前」

「口が過ぎるぞ」

「だからーじけよー邪魔だつて

俺は無言で箱物に手を突き刺し、中に入つていながらじけやした  
鉄の埃みたいな物を抜き取つてやつた。

手になにか湿ったものが滴り落ちてくる。

そいつはそれを見て、恐怖を顔に滲ませ、後ろに体を仰け反らせていた。

手に持つている物を投げ捨てる、俺はまたその場に座り込んで、ダイスを振ることにした。

ダイスは手から転がり落ちると、縁の星マークを表に顕した。

それを手にして、額に当てる、イメージが滝のよつに流れ込んでくる。

女…。茶色い髪をした女と、小汚い部屋で一緒に住んでいる！？

どういうことだらう。この女を嫁にでもするのか？

しかし、ここつどにいるんだ？

取りあえず探すか。女を。

魔法を解いて、元の姿に戻る。

俺は立ち上がり、そのまま浮き上がり、空からイメージに出てきた女を

探し始めた。俺の目は標高2500mの高さからでも、地に歩くネズミの姿まで

確認できるほどの視力を備えている。女を捜す事など造作もない事だ。

「見つけた」

女が立っている場所に、急降下すると、足からふわっと地に舞い降りた。

俺を見て特に驚いた様子も見せない。話しかけてみるか。

「おい」

「あら~、魔王ぢゃんぢゃないの」

「へ？」

「あんたも」いつか来ちゃったの？」

俺は不覚にも動搖してしまった。  
全く見知らぬ世界の見知らぬ女に、正体を見破られ  
ちゃんづけで呼ばれたんだ。  
少し顔を険しくして女に質問を投げつけてみる。

「おい、馴れ馴れしい奴だな、お前」

「何者だ？」

「私？私はゼームス大陸のリアン城の姫よ」

「え、お前まさか、ソフィア？」

「そうだよ」

俺は開いた口が塞がらなかつた。  
散々ゼームス大陸で嫁にしようとして、追い掛け回してた姫が  
この世界に変な姿でいるのだから。

「魔王ちゃん、うわおこでよ」

「困つてんんじょ？」

「……」

行くか…。

俺は静かに姫に向き直り頷くと、後を付いていくことにした。  
細い道へと姫は入り込んでいくと、やがて古びた汚い建物が眼前に現れた。

そこにある鉄の階段に上がっていく姫。  
細い通路沿いに青い鉄の扉が視界に入る。  
姫はその前で立ち止まると俺に言った。

「ここ私なんすよ

「…

「…

姫ともあろう者が、こんな小汚い場所に住んでるのか？

いや、中は思ったより広く、豪華絢爛な家具が置いてあるはずだ。  
鍵を扉に差し込むと、姫が俺を招き入れる。

入った最初の印象を言おう。

狭い、臭い、暗い。

…。

本気でここで住んでるのか？

姫…。

落ちぶれたな…。

…。

「魔王ちゃん、どうせ行くあて無いでしょ」

無いつちや無いが。

「ここで一緒に住もうよ

「お前とか？」

「そつよ

姫は茶色い髪を手で摩りながら、俺を優しく見つめてそつよ言つてきた。

「ふむ、良いだろ?」

姫と魔王はこうしてここで何年も過ぎます事になるが  
その後の物語はいつか誰かが語ってくれるに違いない。

Fin

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8690e/>

---

魔王降臨伝 未知の大陸

2010年10月28日07時43分発行